がんになっても安心して暮らせる街づくり
～がん相談支援センターを地域の支援の輪につなげる～

医療法人安藤内科・循環器科医院
介護支援センターふれあい
末次　香代子

介護支援専門員の立場から

はじめに

私たち介護支援専門員はH12年に新たな社会保障制度として介護保険制度が導入されたと同時に新職種として誕生した。

対象者は1号被保険者の65歳以上の高齢者と40歳～64歳までの特定疾患のある2号被保険者になっている。

高齢になると多疾患を持ちながら在宅生活続けているなか、今回のテーマをいただきかかわってきた利用者の支援内容を振り返り介護支援専門員の立場より報告したい。

介護支援専門員の立場から

【相談経路】

電話相談　面接相談

１、入院先の地域医療連携室より相談が多い
２、家族より
３、地域包括支援センター
４、介護サービス事業所（訪問看護など介護事業所）

【相談から支援開始までの期間】

相談当日～7日で支援開始　（自宅で生活している場合、入院している場合）

【在宅生活の期間】

入院している場合　：　退院後１０日～６０２日　（再入院、看取り）
自宅で生活している場合：　３０日～6ヶ月　（入院、ホスピスへの入所、看取り）

介護支援専門員の立場から

【在宅支援について事例をとおして紹介】

70代男性、妻と同居、子供たちは市外・県外在住

病名　　：　肺がん、脳・骨への転移あり、
　　告知あり

相談経路　　：　医療連携室

在宅生活期間　：　17日（自宅で看取り）

介護支援専門員の立場から

本人の気持ち：帰って息子と話したい。仕事のことも気になる

妻の気持ち　：家が大好きな人なのでつれて帰りたい

【相談から退院までの経過】

医療連携室より依頼の電話。翌日退院前カンファ開催、その足で自宅訪問を行い2日後退院。退院当日在宅支援チームは自宅で待機。状態観察や生活が行えるよう支援内容についてカンファ実施。

介護支援専門員の立場から

（在宅支援チーム）

医療保険　：　往診の出来る医師、訪問看護師、在宅酸素
介護保険　：　訪問介護、訪問入浴、福祉用具、住宅改修、
　　介護支援専門員
そのほか　：　家族や友人・知人、職場の後輩など

【退院後のカンファ内容】
１、医師、看護師など医療チームとの連絡方法について
２、居宅サービス計画書について内容の説明と確認
３、状態変化に伴いサービス内容の見直し可能
４、困りごと相談可能

介護支援専門員の立場から

（残された家族の気持ち）

本人が「帰りたい」というので家につれて帰ろうと決心したが、帰ってからの生活がどうなるのかもわからず不安も大きかった。今振り返ると、大好きな孫がベットに入ってきたり、息子と男同士話をしたり、また仕事関係の人も来てアドバイスしていたなどを考えると痛みやきつさはあったと思うが充実した生活を送れたと思う。

介護者として振り返ると「これでよかったのか」と思う日々であったが、「困ったときはいつでも電話していいよ」「死を自分のせいにしないで」の一言は精神的にとても楽になった。いま思い浮かべるのは畑を見て「大根の種を植えなければ」と言っていたことや家族と話しているときの笑顔しか思い浮かばない。

介護支援専門員の立場から

【課題】

１、在宅での主治医が決まっていない、主治医との連携がとりにくい

２、疾患への知識不足

３、介護力不足

４、精神的に不安やストレスが大きい

５、経済的に負担が大きい

６、医療処置が必要な場合、家族指導が十分に行われていない

７、介護認定が届いていない、申請がされていない

介護支援専門員の立場から

【まとめ】

１、医療との連携：　在宅医、急変時の入院先の確保、

２、介護負担軽減：　介護サービスの利用、家族の協力

３、精神的なサポート体制：

医師、看護師などによる専門的なアドバイス

在宅支援チーム同士の連携

４、経済的負担軽減：　ターミナルは医療保険となり3割負担

退院時・通院時の交通手段

５、医療処置への家族指導

６、介護保険の申請

介護支援専門員の立場から

【おわりに】

「住み慣れた自宅で生活をしたい」誰もが普通に思うことだが、この言葉を素直にいえない状況・状態も多くあると感じる。今回の事例では本人の思いを妻が受け入れ自宅での看取りを行うことが出来た。しかし日々状態が変化するなか本人自身、また妻の不安やストレスは言いようの無いものだと受け止めている。

病院や施設では24時間の支援体制が確保されているが在宅では家族がその役割を担っている。私たち在宅支援チームは点でのサービスになっているのが現状である。しかし在宅支援チーム同士情報交換を行い家族より連絡あれば早急に対応するなど工夫や連携をとって支援を行っている。

医療との連携、疾患への知識不足、精神的なサポートなど在宅支援をする側の課題は多く残されている中、今回「がん相談支援センター」の存在を知ることにより看取り経験の少ない介護支援専門員や介護サービス支援者にとって心強いと感じた。しかし残念なことにこの存在を知っているものは私の周囲には誰一人いなかった。

「がん相談支援センター」の存在や役割を知ることは地域住民のみならず在宅生活を支援する私たちチームにとっても力強く感じる。がんになっても地域で生活できる支援チームとしてともにがんばりたいと思う。

ご清聴ありがとうございました。